

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 土方久功日記Ⅱ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001015">https://doi.org/10.15021/00001015</a>

## 註

## 〔第8冊〕

- 1) 叔母様 = 土方愛子。『土方久功日記』Ⅰ（以下、『日記』Ⅰと略す）、註144参照。
- 2) 「牧場の花嫁」= 第31回公演（7月3~12日）。アウグスト・シュトラン作、小山内薫訳・演出、吉田謙吉装置。伏見直江（女）、千田是也（男）等出演。築地小劇場の公演演目、キャスト、スタッフについては、水品春樹著『新劇去来』（1971年、ダヴィッド社）を参照した。以下同じ。
- 3) 「母の愛」= アウグスト・ストリンドベルク作、楠山正雄訳、小山内薫演出、溝口三郎装置、花柳はるみ（母）、若宮美子（娘女優）、山本安英（リースヘン）等出演。
- 4) 遠山五郎 = 『日記』Ⅰ、註227参照。
- 5) 久顕 = 久功の弟。『日記』Ⅰ、註33参照。
- 6) 七十度 = 21.1℃。
- 7) 六十度 = 15.5℃。
- 8) 青田 = 青田幸吾。『日記』Ⅰ、註122参照。
- 9) 「ユリイ」= 第32回公演（7月17~26日）。「ジュリイ嬢」（令嬢ユリエ）。アウグスト・ストリンドベルク作、楠山正雄訳、土方与志演出、伊藤熹朔装置。山本安英（令嬢ジュリイ）、千田是也（ジャン）、岸輝子（クリステル）等出演。
- 10) 「サムーン」= 「熱風」。アウグスト・ストリンドベルク作、楠山正雄訳、青山杉作演出、伊藤熹朔装置。若宮美子（ビスクラ）、小野宮吉（その情人）、青山杉作（ヅアマヴ隊の中尉）等出演。
- 11) 伊藤の囃サン = 千田是也。本名、伊藤囃夫。明治三十七年（1904）生まれ。建築家伊藤為吉の六男。長兄は、舞踏家の伊藤道郎、次兄は、舞台美術家の伊藤熹朔。東京府立第一中学校在学中から、舞台美術研究所に通い、築地小劇場創立に参加。
- 12) 上原 = 『日記』Ⅰ、註244参照。
- 13) 勝チャン = 『日記』Ⅰ、註241参照。
- 14) 浅利鶴雄 = 『日記』Ⅰ、註17参照。
- 15) 長田幹彦 = 小説家・作詞家。明治二十年（1887）生まれ。早大英文科卒。長田秀雄の弟。兄の影響で、早くから「明星」や「スバル」に参加する。北海道放浪体験をもとにした「滯」で高い評価を得る。多くの作品を発表するが、やがて文壇から遠ざかり、東京中央放送局の文芸顧問となり、ラジオドラマを創始した。
- 16) お玉様 = 『日記』Ⅰ、註94参照。
- 17) 文チャン = 小城文子。『日記』Ⅰ、註51参照。
- 18) 鎌倉 = 鎌倉・大町に柴山矢八の別荘があった。『日記』Ⅰ、註29参照。
- 19) 海浜博覧会 = 『日記』Ⅰ、註201参照。
- 20) 昌道 = 『日記』Ⅰ、註31参照。
- 21) 百合子 = 柴山百合子。昌生、梅子の長女。
- 22) 綾子 = 『日記』Ⅰ、註168参照。
- 23) 久武 = 『日記』Ⅰ、註203参照。
- 24) 梅子叔母様 = 『日記』Ⅰ、註57参照。
- 25) 忠坊 = 中沢忠久。佑、英子の長男。大正十二年（1923）生まれ。
- 26) 兄 = 土方久俊。『日記』Ⅰ、註1参照。
- 27) 母 = 土方初栄。『日記』Ⅰ、註43参照。
- 28) 英子 = 中沢英子。『日記』Ⅰ、註20参照。
- 29) 三沢寛 = 東京美術学校彫刻科の同級生。

- 30) 讓二叔父様 = 『日記』 I, 註 143 参照。
- 31) 直矢叔父様 = 『日記』 I, 註注 58 参照。
- 32) お玉様 = 『日記』 I, 註 94 参照。
- 33) 人間 = 第 33 回公演 (9 月 12~24 日)。小山内薫訳・演出。吉田謙吉装置。千田是也 (アレキサンダー), 小杉義男 (人殺し), 友田恭助 (青年, 乞食), 田村秋子 (少女) 等出演。
- 34) 三科 = 三科会。大正十三年 (1924) 10 月, 村山知義, 柳瀬正夢, 岡本唐貴らにより結成された, 未来派, 表現派, ダダイズム, 超現実主義などの急進的傾向の集団。展覧会を開催する一方, 翌年には, 築地小劇場で, 「劇場の三科」という前衛劇を上演した。
- 35) 昌生叔父様 = 『日記』 I, 註 67 参照。
- 36) 福寿院 = 現・中野区本町三丁目にある, 真言宗豊山派の寺。
- 37) 心座 = 大正十四年 (1925), 村山知義, 河原崎長十郎, 池谷信三郎らによって結成された劇団。第一回公演は, 「ユアナ」。翌年 1 月の第二回公演は, 「孤児の処置」だった。
- 38) 「ペリカン」 = 第 34 回公演 (10 月 2~11 日)。ストリンドベルク作, 森鷗外訳。青山杉作演出, 溝口三郎装置。田村秋子 (エリーゼ), 友田恭助 (息子, フリードリヒ), 山本安英 (娘, ゲルタ), 千田是也 (婿, アクセル) 等出演。
- 39) キツネ = 築地小劇場のロビーの右手突き当りにあった休憩室兼喫煙室。劇場近くの和菓子屋・喜津弥が経営していた (開場当時は, 喜津弥はまだなく, メゾン鴻の巣の出店があった)。
- 40) 芽生座 = 大正十一年 (1922), 岡田八千代 (小山内薫の妹) によって創立された児童劇団。
- 41) 『遺稿詩集』に収載。
- 42) 一部改め, 『遺稿詩集』に収載。
- 43) 黒田孝雄 = 黒田善治 (男爵) の長男。明治三十二年 (1899) 生まれ。学習院の同窓。
- 44) 池田清就 = 池田徳定 (子爵) の長男。明治三十一年 (1898) 生まれ。学習院の同窓。
- 45) 「熊」 = 第 2 回昼公演 (10 月 17 日~11 月 1 日)。再演。チェーホフ的一幕もの三つのうちの一つ。米川正夫訳, 小山内薫演出, 溝口三郎装置。花柳はるみ (ポポーワ), 横田儼 (スミルノオフ), 小杉義男 (ルカア) 出演。
- 46) 「犬」 = 同。再演。小山内薫訳・演出。東屋三郎 (父), 山本安英 (娘), 汐見洋 (青年) 出演。
- 47) 「叔父ワアニア」 = 第 35 回公演 (10 月 16~26 日)。米川正夫訳, 小山内薫演出, 溝口三郎装置。汐見洋 (セレプリアアコフ), 花柳はるみ (エレーナ), 山本安英 (ソーニア), 岸輝子 (マリヤ), 東屋三郎 (ウオイニッキイ), 青山杉作 (アーストロフ) 等出演。
- 48) 「社会の敵」 = 第 36 回公演 (10 月 30 日~11 月 8 日)。イブセン作, 楠山正雄訳, 土方与志演出, 吉田謙吉装置。丸山定夫主演。
- 49) 『遺稿詩集』に収載。
- 50) 一部改め, 『遺稿詩集』に収載。
- 51) 一部改め, 『遺稿詩集』に収載。
- 52) 本田サン = 久功の母・初栄の叔父, 本田親済 (男爵, 貴族院議員)。
- 53) 「夜の宿」 (どん底) = 第 37 回公演 (11 月 13~23 日)。再演。小山内薫訳・演出, 溝口三郎装置。
- 54) 「各人各説」 (みんな尤だ) = 第 38 回公演 (11 月 27 日~12 月 6 日)。ビランデルロ作, 北村喜八訳, 土方与志演出, 伊藤熹燮装置。丸山定夫 (ミケレ・ロッカ), 汐見洋 (パレガアリ家の客), 東山千栄子 (デアア・モレルロ), 田村秋子 (パレガアリ), 千田是也 (ディエゴ) 等出演。

〔第 9 冊〕

- 55) 「青い鳥」 = 第 39 回公演 (12 月 11~27 日)。クリスマス・プレゼントの第 2 弾。楠山正雄訳。

- 小山内・土方・青山の共同演出、伊藤熹朔装置。マチネーを入れて17日間20回の公演で、6000余名の観客を集め、内1100名弱が子供だった。14歳の及川道子がチルチルを、七代目沢村宗十郎と帝劇女優河村菊江の子、河村匡章がミチルを演じた。
- 56) 「ゼニス商人」= 第40回公演(元日~17日)。小山内薫訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。藤輪和正(ベニス公爵)、伊達信(モロッコの貴族)、滝沢修(アラゴンの貴族)、山本安英(ポーシャ)、夏川静江(客演・ジェシカ)、汐見洋(パッサーニオ)、千田是也(アントニオ)、島田敬一(ランセロット)、岸輝子(ネリサ)等出演。なお、千田は、これが築地最後の舞台となった。
- 57) マルタン棒システムの舞台装置 = 第36回公演、『社会の敵』の上演のさい、舞台装置を担当した吉田謙吉と土方与志の共同創案の、建築現場の足場に使う丸太を使った構成舞台。当時、築地小劇場の経営が苦しくなり、舞台装置に費用をかけられなくなったため、経費節約のために考え出された。新しいスタイルで、オリジナルであることで好評だったために、後に、『聖ジョーン』『毛猿』『ベニス商人』『夜』『ホオゼ』『愛欲』の一部などでも、丸太組みを基礎舞台として使われた。
- 58) 「愛と死との戯」= 「愛と死の戯」。第41回公演(1月20~26日)。ロマン・ロラン作、片山敏彦訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。作者の生誕60年を記念しての公演。毎夜、千葉亀雄、高村光太郎、本間久雄、小山内薫、秋田雨雀等が開演前にロランについて講演した。山本安英、滝沢修の演技が評価された。
- 59) 「タンタジールの死」= 「タンタヂイルの死」。第42回公演(1月29日~2月7日)。小山内薫訳、青山杉作演出、伊藤熹朔装置。河村匡章(タンタヂイル)、東山千栄子(イグレエス)等出演。
- 60) 「群盲」= 同上。小山内薫訳・演出、伊藤熹朔装置。生方賢一郎(第一の男盲)、丸山定夫(第二の男盲)、友田恭助(第三の男盲)、東屋三郎(老人の男盲)等出演。
- 61) 一部改め、「丘」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 62) 「三人姉妹」= 第43回公演(2月12~28日)。再演。チャーホフ作、米川正夫訳、小山内薫演出、溝口三郎装置。友田恭助(アンドレー)、山本安英(オリガ)、伏見直江(イリーナ)、田村秋子(マーシャ)、高橋豊子(ナターシャ)出演。大正十四年(1925)5月初演。
- 63) 扇州園 = 『日記』I、註171参照。
- 64) 中央美術 = 第七回中央美術展。会場は、上野日本美術協会列品館。中央美術展は、大正四年(1915)創刊の美術雑誌『中央美術』を主宰した田口掬汀が設けた日本画と西洋画の公募展覧会で、大正九年(1920)に第一回が開催され、昭和十一年(1936)の第12回まで続けられた。同展での入選は、新人の登竜門としての意味合いがあり、後に名をなす多くの画家たちが、ここに出品していた。
- 65) 「春のめざめ」= 「春の目ざめ」。第6回昼公演(2月13日~3月14日)。再演。ヴェデキント作、野上豊一郎訳、青山杉作演出、伊藤熹朔装置。大正十四年(1925)5月初演。
- 66) 「聖ジョーン」= 第44回公演(3月5~14日)。バーナード・ショー作、北村喜八訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。東屋三郎(ロベル)、山本安英(ジョーン)、友田恭助(シャルル皇太子)等出演。
- 67) 「役の行者」= 第45回公演(3月2日~4月11日)。坪内逍遙作、小山内薫演出、伊藤熹朔装置。東山千栄子(行者の母)、滝沢修(青虫)、東屋三郎(爺)、山本安英(比豆知)、汐見洋(韓国の広足)、薄田研二(獣神)、岸輝子(女怪)、青山杉作(役の行者)等出演。初の創作劇であったこともあり、各方面からの注目を浴び、芝居は大入りであった。
- 68) 御祖始様 = 杉並区堀ノ内にある妙法寺。江戸時代から、「堀ノ内のお祖師さま」として、親しまれていた。
- 69) 新橋演舞場 = 東京・銀座にある松竹系の劇場。大正十四年(1925)4月1日開場。京都の都

おどりを演じる祇園の歌舞練場に対抗して、新橋芸妓の東おどりのために作られた舞台だったが、歌舞伎、新派なども上演した。

- 70) 「ホオゼ」= 第46回公演(4月16~25日)。久保栄訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。丸山定夫(テオバルト・マスケ)、伏見直江(マスケの妻、ルイゼ・マスケ)、田村秋子(ドイタア)、小野宮吉(スカロン)、島田敬一(ムンデルシュタム)等出演。衆人環視の中で小市民マスケの妻が腰巻を落とすという当時としてはショッキングな出来事を発端とする喜劇。
- 71) 聖徳太子奉讃美術展覧会 = この年第一回展が開かれた。会期は5月1日から6月10日まで。財団法人聖徳太子奉讃会の主催で行われ、同会が美術団体ではないことから、諸団体が偏りなく参加するものとなり、当時として唯一の総合展であることを特色とした。第一回展は、東京府美術館の開館と同時に開催され、日本初の美術館が開館したこともあいまって話題を集めた。出品は日本画、洋画、彫刻、工芸の四部で構成され、すでに帝展、院展、二科展など明瞭な団体意識が芽生えていた当時の日本美術界にあって、各派の団体色に偏らず、美術界の現状が一望できる展覧会として注目された。
- 72) 一部改め、「私の室」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 73) 「長男の権利」= 第8回昼の公演(4月24日~5月23日)。小山内薫訳・演出、溝口三郎装置。
- 74) 「砂時計」= 同上。小山内薫訳・演出、伊藤熹燾装置。築地小劇場初の仮面劇。
- 75) 「ミシュエル・オオクレル」= 第47回公演(4月30日~5月9日)。シャルル・ヴィルドラック作、内藤濯訳、青山杉作演出、松永津志馬装置。滝沢修(ミシュエル)、友田恭助(ブロンドオ)、岸輝子(シュザンヌ)、東屋三郎(コルソン)、伊達信(ルイ・カトラン)等出演。作者ヴィルドラックの来日を記念しての公演。
- 76) 「闇の力」= 第48回公演(5月14~30日)。トルストイ作、米川正夫訳、小山内薫演出、伊藤熹燾・溝口三郎装置。薄田研二(ニキータ)、伏見直江(アニユートカ)、岸輝子(アニーシャ)、汐見洋(ミートリッチ)等出演。
- 77) 薄田君 = 薄田研二。明治三十一年(1898)、福岡県に生れる。大正十四年(1925)、築地小劇場研究生となり、「どん底」や「役の行者」で舞台に上がり、その演技が認められる。築地小劇場解散後、新築地劇団結成に参加し、その中心となる。
- 78) 三光教会 = 芝白金三光町にあった教会。大正元年(1912)設立。
- 79) ロボット = 「人造人間」。第9回昼公演(6月5~27日)。再演。カール・チャペック兄弟作、宇賀伊津緒訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。友田恭助(ドオミン)、隅田龍郎(ゴオル博士)、小杉義男(ファブライ)、丸山定夫(アルキスト)、滝沢修(ヘレマイヤ博士)、東屋三郎(バスマン)、山本安英(ヘレナ)等出演。初演は、大正十三年(1924)7月、第5回公演。
- 80) 「朝から夜中まで」= 第49回公演(6月4~20日)。再演。丸山定夫(出納係)、吉野光枝(母)、岸輝子(妻)、友田恭助(助手・蹄場の給仕)、薄田研二(頭取)、滝沢修(門番)、山本安英(婦人)、東山千栄子(救世軍の女士官)等出演。
- 81) 一部改め、「夏が来る」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 82) 花月園 = 大正三年(1914)、新橋の料亭花月の経営者・平岡広高が、横浜・鶴見の東福寺の境内3万坪を借りて創設した児童遊園地。はじめは、寺の周りの動物園、噴水、花壇、大滝、ブランコなどだけだったが、第一次世界大戦の好景気によって施設も充実し、大山すべり、豆汽車、観覧車、つり橋、ボートなどを次々に作った。また、大人の社交場として、本格的なダンスホールも作られ、お花見や菊人形、お化け大会など、年間を通じていろいろな催しが開かれ、「東洋一の大遊園地」といわれた。
- 83) 兄夫妻 = 土方久俊・文子夫妻。
- 84) 本田の叔母様 = 本田伊萬子。本田親済(男爵)夫人。坊城俊政(伯爵)の六女。明治八年(1875)



生まれ。

- 85) 人形座 = 伊藤熹朔、千田是也、遠山静雄らの演劇青年たちが、ヨーロッパにおける芸術運動の動きを受け、新しい演劇創造の実験として結成したマリオネットの人形劇団。大正十二年(1923)11月23~25日、東京麻布の遠山邸で、メーテルリンクの「アグラセースとセリセット」を人形座試演会の名で上演した。この試演は、三日間だけの、しかも私邸でのサロンの名ものであったが、演劇専門家の間で評判となった。日本における現代人形劇の幕開け、と言われている。

〔第10冊〕

- 86) 「愛欲」 = 「愛慾」。第50回公演(7月1日~17日)。武者小路実篤作、土方与志演出、吉田謙吉装置。薄田研二(野中新一)、山本安英(野中千代子)、友田恭助(野中英次)等出演。
- 87) 「奈落」 = 同上。小山内薫作・演出、荒井金太郎装置。汐見洋(富さん)、東屋三郎(八さん)、滝沢修(芳さん)、高橋豊子(役者)等出演。
- 88) 金沢庸治 = 建築家。明治三十三年(1900)生まれ。東京美術学校卒業後、同校で教鞭をとる。正木記念館、黒田記念館の階段手すり装飾を設計した。
- 89) アルト・ハイデルベルヒ = 「思ひ出」。第10回目の昼公演。初演は、大正十三年(1924)の第9回公演(夏季臨時公演)。マイエルフェステル作、松居松葉訳、青山杉作・演出、溝口三郎装置。滝沢修(ハインリッヒ)、汐見洋(ニットナア博士)、山本安英(ケエティイ)等出演。
- 90) 「愛と詩と国家奉仕について」 = 第51回公演(7月20~29日)。黒田辰男訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。滝沢修(恋をしている詩人)等出演。一幕もの。
- 91) 「心にもなき悲劇役者」 = 同上。熊沢復六訳、小山内薫演出、溝口三郎装置。汐見洋(一家の父)等出演。一幕もの。
- 92) 「陽気な死」 = 同上。高倉輝訳、青山杉作演出、伊藤熹朔装置。千田是也(アルレキン)、友田恭助(ピエロ)、田村秋子(コランビン)、東屋三郎(医者)等出演。一幕もの。
- 93) 造形社 = 造形社。浅野孟府、飛鳥哲雄、神原泰ら11名の「同僚」が、大正十四年(1925)12月1日付『読売新聞』に、「『造形』出生並に宣言」を發して結成したグループ。11人のうち、浅野、神原等6人は旧「アクション」の同人であり、「造形」グループの中核をなした。「宣言」にあるように、健康でオプティミズムを基調とする作品制作を目指す内容が盛り込まれた。第一回展は、大正十五年3月23~29日、銀座・松屋ホールで、第二回展は、同年8月23~29日、三越呉服店で開かれた。
- 94) 一部改め、「工人サマクによする」と題し、『文化の果にて』に収載。
- 95) 忠直 = 中沢忠直。佑、英子の次男。忠久の弟。大正十四年(1925)1月13日生まれ。
- 96) 人形座の公演 = 築地小劇場で開催された人形座の第1回公演。ウイットホーゲル作「誰が一番馬鹿か?」。9月24日の初日は、大入りで大成功だったという(小野耕世「小野佐世男の絵日記」、『図書』2009年12月号)。
- 97) 一部改め、「彼女」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 98) 明神様 = 湯島神社。湯島天神、湯島天満宮とも称する。『縁起』などによれば、文和四年(1355)2月25日、郷民が菅原道真による霊夢によって勧請し、文明十年(1478)、大田道灌が再興したとする。江戸の大火などにより社殿を数度にわたり焼失し、再建された。文久三年(1863)3月、社殿及び古記録などを焼失し、社殿は久しく復興しなかったが、明治十八年(1885)、再建された。10月10日は祭礼で、前日より賑う。
- 99) 詩話会 = 大正六年(1917)11月結成された、詩人の社交的な親睦団体。会員には川路柳紅、白鳥省吾らが居た。大正十年(1921)10月、『日本詩人』を創刊し、大正十五年11月まで、

59冊刊行した。

- 100) 『遺稿詩集』に収載。
- 101) 同上
- 102) 「横っ面をはられる彼」= 第52回公演(10月22~31日)。再演。熊沢復六・北村喜八訳、青山杉作演出、伊藤熹朔装置。汐見洋(「彼」)、山本安英(コンスエラ)、東屋三郎(マンツイニイ)、丸山定夫(プリケ)等出演。
- 103) 「大塩平八郎」= 第53回公演(11月5~21日)。中村吉蔵作、小山内薫演出、木村莊八装置。3回目の創作劇公演。築地小劇場にとっての初の騒物。薄田研二(大塩平八郎)、滝沢修(同格之助)、丸山定夫(小泉淵次郎)、島田敬一(瀬田濟之助)等出演。
- 104) 一部改め、「月(1)」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 105) 「ヴィクトリア勲章のオフレアティ」= ビクトリア勲章のオフレアティ。第11回昼公演(11月6日~12月5日)。築地小劇場文芸部訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。楠田清(オフレアティ)、岸輝子(その母親)等出演。
- 106) 「馬盜坊」= 同上。森嶋外訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。岸輝子(第一の娘)、東山千栄子(第二の娘)、汐見洋(牧師)、丸山定夫(ボスネット)、高橋豊子(フィイミイ)等出演。
- 107) るり子= 土方綾子と大石茂美の次女。まり子の妹。
- 108) 「夜」= 第54回公演(11月26日~12月5日)。マルチネ作、佐々木孝丸訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。築地小劇場初のプロレタリア演劇で、「築地小劇場に於てのみ今回に限り上演許可」になった。薄田研二(パトマ)、伊達信(レドリユウ)、山本安英(マリエット)、友田恭助(敵国の将軍)等出演。

〔第11冊〕

- 109) 一部改め、「私はおきてゐる」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 110) 一部改め、「月(2)」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 111) 一部改め、「月(3)」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 112) 検察官= 第56回公演(1月6日~16日)。再演。ゴーゴリ作、米川正夫訳、小山内薫演出、溝口三郎装置。汐見洋(フレスタコフ)、小宮譲二(コロブキン)、東屋三郎(市長)、東山千栄子(妻)、村瀬幸子(娘)、島田敬一(学務監督)等出演。
- 113) 玉川= 大正十三年(1924)7月、荒木石次郎が田園調布に45坪の温室を開設したのを手始めとして、その周辺に花卉栽培のための温室が増えていった。田園都市建設により、中産階級の居住者が増加し、花卉の需要が出てきたためである。栽培地域は、多摩川沿いを等々力あたりまで伸び、やがて「村」ともいえるような、温室の群立が見られるようになった。この一帯が、消費地に近く、しかも台地を背負い、かつ多摩川を目前にした低地で、水に恵まれ、花卉栽培適地であったことによる。なかでも玉川村が著名で、栽培者の増加、経営規模の拡大が見られた。この玉川温室村を形成した栽培者の大半は、地元農家以外の他府県からの移住者で、高い技術をもつものもあり、花卉栽培を近代的事業として発展させるよう努力していた。
- 114) 一部改め、「月(4)」と題し、『遺稿詩集』に収載。また、「月(五題のうち)」の前半部分として、『文化の果にて』に収載。
- 115) 一部改め、「月(5)」と題し、『遺稿詩集』に収載。また、「月(五題のうち)」の後半部分として、『文化の果にて』に収載。
- 116) 「熊」= 第12回昼公演(1月8~30日、土日)。再演。米川正夫訳、小山内薫演出、溝口三郎装置。東山千栄子(ボポーワ)、三浦洋平(スミルノフ)等出演。

- 117) 「心にもなき悲劇役者」= 同上。再演。熊沢復六訳、小山内薫演出、溝口三郎装置。楠田清（トルカチョフ）、東屋三郎（ムラアシュキン）等出演。
- 118) 「記念祭」= 同上。熊沢復六訳、小山内薫演出、溝口三郎装置。御橋公（シブウチン）、岸輝子（タチャアナ）、汐見洋（ヒイリン）、高橋豊子（メルチウトキナ）等出演。
- 119) 一部改め、「月（6）」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 120) 「悪魔の弟子」= 第57回公演（1月24日～2月6日）。バーナード・ショー作、中川龍一訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。青山杉作（牧師）、岸輝子（ダッジョン夫人）、丸山定夫（その長子リチャード）、伊達信（その次子クリスチー）、吉田日出子（姪エッシー）、高橋豊子（牧師夫人）、東屋三郎（代言人）、三浦洋平（バアゴイン将軍）、小杉義男（スインドン少佐）等出演。
- 121) 近衛三聯隊 = 近衛歩兵第三聯隊。明治十八年（1885）7月創設。兵営ははじめ霞ヶ関に置かれたが、明治二十六年（1893）5月、赤坂一ツ木町に移転した。
- 122) 後藤 = 後藤禎二。大正十五年（1926）3月、東京美術学校西洋画科を卒業し、父親との約束であった軍隊に一年志願兵として、近衛歩兵第三聯隊に入隊した。一年後、軍曹に昇格して除隊した。昭和三年（1928）、フランスへ渡り、パリでフランスワ及びジュリアン研究所で三年間学んだ。昭和十七（1942）年、久功に川名敬子（医師）を紹介し、二人は結婚した。
- 123) 桜友会 = 学習院出身者相互の親睦・交流を目的とする会。明治三十三年（1900）に「学習院同窓会」として発足し、大正九年（1920）に桜友会に改組された。
- 124) マクベス = 第58回公演（2月11～27日）。シェークスピア作、森鷗外訳、小山内薫・青山杉作演出、伊藤薫朔装置。丸山定夫（マクベス）、東山千栄子（夫人）、楠田清（医師）、村瀬幸子（侍女）、汐見洋（バンコオ）、伊達信（マクダッフ）等出演。
- 125) 金子九平次 = 明治二十八年（1895）、東京に生まれる。父と長谷川栄作に彫刻を学ぶ。大正十年（1921）、第三回帝展に『春愁』で初入選。大正十一年（1922）、渡仏し、ブルデルに師事し、サロン・ドートンス等に出品する。十五年帰国し、国画創作協会彫刻部会員となる。昭和七年（1932）国画会を脱退し、昭和十二年（1937）、新古典協会を創立する。
- 126) 六十度 = 15.5℃
- 127) 「桜の園」= 第59回公演（3月4～27日）。再演。米川正夫訳、小山内薫演出、溝口三郎装置。東山千栄子（ラーネフスカヤ夫人）、伊達信（トロフィモフ）、山本安英（ワーニヤ）、薄田研二（ガアエフ）、丸山定夫（ロバーヒン）、村瀬幸子（アアニヤ）等出演。
- 128) 「法成寺物語」= 第60回公演（4月1～10日）。谷崎潤一郎作。4幕。青山杉作演出、松永津志馬装置。友田恭助（藤原道長）、山本安英（四の御方）、丸山定夫（藤原隆家）、薄田研二（定朝）等出演。
- 129) 「彼女」= 第61回公演（4月15～24日）。土方与志演出、吉田謙吉装置。山本安英（すみ子）、薄田研二（すみ子の伯父）、高橋豊子（お仙）、吉野光枝（おわか）、吉田日出子（中村染代）等出演。はじめ『何が彼女をそうさせたか』であったが、官憲から『彼女』への改題を強要された。
- 130) 「復讐の神」= 第15回昼公演（5月14日～6月12日、土日毎昼1時）。清野暢一郎訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。田辺若男（イエケル）、吉田日出子（リフケレ）、村瀬幸子（マンケ）等出演。初めてのユダヤ芝居。
- 131) 「心の劇場」= 同上。高倉輝訳、吉田謙吉演出・装置。洪海星（教授）、伊達信（M1）、小宮譲二（M2）、島田敬一（M3）等出演。
- 132) 六十度 = 15.5℃
- 133) 心座 = 大正十四年（1925）九月、河原崎長十郎、村山知義らによって結成された劇団。この日は、



第五回公演だった。

- 134) 「リリオム」= 第 64 回公演 (6 月 11~26 日)。小山内薫訳, 青山杉作演出, 伊藤熹朔装置。友田恭助 (リリオム), 高橋豊子 (ムスカット), 月野道代 (マリア), 山本安英 (ユリア) 等出演。
- 135) 「郭公」= 第 16 回昼公演 (6 月 18 日 ~7 月 24 日, 土日毎昼 1 時)。北村喜八訳・演出, 伊藤熹朔装置。汐見洋 (ディビッド), 岸輝子 (アニイ) 等出演。
- 136) 「秋の火」= 同上。小山内薫訳・演出。汐見洋 (ヘルムス), 丸山定夫 (クラカウ) 等出演。
- 137) 「現実を覗く」= 同上。北村喜八訳・演出。村瀬幸子 (グイリア), 薄田研二 (フェルーチヨ) 等出演。
- 138) 芦屋の家 = 祖母・柴山琴子の妹, 清江の嫁ぎ先, 皿井立三郎 (医学博士) の家。
- 139) 渡辺君 = 渡辺弘行。美術学校彫刻科の後輩。
- 140) 富士神社 = 文京区本駒込五丁目 7-1 にある神社。天正二年 (1574), 旧加賀前田家上屋敷内に駿河の富士浅間を勧請して祀られていたものを, 寛永六年 (1629), この地に移したと伝えられる。祭神は木花開耶姫命。氏子を持たない富士講中組織でなりたっている。毎年 6 月 30 日, 7 月 1 日, 2 日, 山開の祭典を行い, この三日間は, 境内のみならず, 電車通りまで植木市, 子供向けの露店などが出て, 夜遅くまで賑わった。「江戸名所図会」等にも紹介されている。
- 141) 与平 = 土方与平。土方与志, 梅子の次男。昭和二年 (1927) 7 月 11 日生まれ。
- 142) 築地の芝居 = 築地小劇場は, 8 月 1 日から, 2 班に分かれて, 鎌倉を振り出しに, 約 1 月の旅興業を行った。第 1 班は, 演目は「愛欲」「熊」で, 土方与志が引率し, 友田, 薄田, 島田等が同行した。第 2 班は, 演目は「息子」「犬」「長男の権利」で, 水品春樹, 東屋, 丸山等が避暑地を回って山形まで行った。
- 143) 鎌倉劇場 = 大正末, 塔の辻の大通りに出来た 2 階建て, モルタル造りの劇場。映画の上映館でもあった。
- 144) 構造社 = 大正十五年 (1926), 齊藤素巖と日名子実三が設立した, 在野の彫刻団体。昭和二年 (1927), 東京府美術館で第 1 回展を開催した。翌年には, 洋画家の神津港人を主任とする絵画部を設置し, 総合美術団体となる。
- 145) 『遺稿詩集』に記載。
- 146) 附属 = 雪ノ下の神奈川県師範学校附属小学校。現・横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校。
- 147) 『遺稿詩集』に記載。
- 148) 一部改め, 「腕 2」と題し, 『遺稿詩集』に記載。
- 149) 一部改め, 「腕 1」と題し, 『遺稿詩集』に記載。
- 150) 天園 = 六国峠ともいう。二階堂の北に位置する。山名は東郷平八郎の命名という。俗称, 鎌倉アルプスのうちの一峰。標高約 150m。現在, 鎌倉アルプスのハイキングコースとなり賑う。
- 151) 国宝館 = 鎌倉国宝館 (当時, 鎌倉町立。現在, 鎌倉市立)。鶴岡八幡宮の境内にある歴史・美術博物館で, 昭和三年 (1928) 4 月に開館した。なお, この大理石のレリーフは, 鎌倉国宝館に収蔵されなかったようである。

〔第 12 冊〕

- 152) 坊城俊賢 = 坊城俊章 (伯爵) の五男。明治三十年 (1897) 生まれ。本田親済夫人・伊萬子の甥。明治四十三年 (1910), 分家・坊城俊延 (男爵) の養子となり, 分家の跡を継ぐ。後, 貴族院議員となる。
- 153) 女ノ子 = 柴山昌生, 梅子の三女, 昭子。後, 宮本満茂に嫁す。
- 154) 山城 = 大正六年 (1917) 3 月に竣工した扶桑型二番艦。第一次世界大戦に参加後, 昭和五年 (1930)

- より改装が行われた。
- 155) 三笠 = 明治三十五年 (1902), イギリスで建造された軍艦。明治三十八年 (1905) 5月の日本海海戦では、連合艦隊の旗艦として東郷平八郎長官が座乗した。大正十五年 (1926), 記念艦三笠として、横須賀に保存された。
- 156) 『遺稿詩集』に収載。
- 157) 『遺稿詩集』に収載。
- 158) 一部改め, 「青蜥蜴の夢」(谷川健一編著『青春の記録8 わが青春のとき』)所収。1968年, 三一書房)に収載(13頁上~18頁上)。
- 159) 奥沢 = 東京都世田谷区南東部にある住宅地。
- 160) 龍岡町 = 現在の文京区湯島四丁目。
- 161) 引橋 = 三浦市の南下浦町菊名, 三崎町小網代, 初声町下宮田の境にある地。戦国時代, ここに引橋があったことから名づけられた(引橋とは, 敵の侵入を防ぐため, 水平に引くことのできた, 可動式の橋のこと)。
- 162) 油壺 = 三浦半島南西部に位置し, 相模湾に面する。三浦市の網代崎と名向崎に挟まれた幅100~150メートル, 奥行き700メートルのリアス式の入江。この入江は, 油壺湾と呼ばれている。
- 163) 金沢 = 三浦半島の北東部, 平潟湾の北西に位置する。地内には, 金沢湊, 称名寺, 瀬戸明神社がある。江戸期には, 金沢八景の名勝地として知られ, 六浦荘と同一地域, 富岡村以南の久良岐郡域が金沢と総称されるようになったという。
- 164) 九覧亭 = 南北朝期に方崖禪師が開山した禅寺, 臨済宗建長寺派金竜院内の丘陵上にある建物。金沢八景の眺望台の一つ。八景と能見堂の地を併せて名勝を九覧できるところから, 心越禪師が名づけたという。
- 165) 朝比奈峠 = 鎌倉と横浜の六浦・金沢地域を結ぶ往還路として重要な峠道。鎌倉七切通の一つ。今日, 七切通中もっともよく旧状をとどめる貴重な遺跡で, 「朝夷奈切通」として国の史跡に指定されている。『吾妻鑑』には, 仁治元年十一月造営を議定し, 翌二年四月, 道造りに着手したとある。
- 166) 金沢ノ旅 = 4月2・3日, 一泊で弟・久顕と神奈川県・金沢へ行った時の旅行記は, 日記4月3日~7日に分けて記されている。後に, 「金沢の旅」と題され, 四百字詰原稿用紙21枚に書き直された。この旅行記は, 『同時代』34号(1979年8月)に掲載されている。
- 167) 臨海実験所 = 現・東京大学臨海実験所。明治十九年(1886)に, 三崎町入船の御番所跡地に東京帝国大学臨海実験所が設立されたが, 同三十年(1897), 油壺に移転した。生物学者や学徒の研究所として大いに実績をあげた。網代崎の南端にあり, 戦国時代, 三浦市の居城である新井城の本丸があったと伝えられている。
- 168) 城ヶ嶋 = 城ヶ島。三浦半島の最南端, 三浦市三崎町にある島。南方海上約200メートルに位置する。周囲約4キロメートル, 東西1.8キロメートル, 南北最長300メートルの小島。当時はまだ, 城ヶ島大橋がなく, 三崎とは海を隔てていた。明治二年(1869)に建設された灯台は関東大震災で崩壊したが, 昭和二年(1927), 白色円形のコンクリート造りのものが再建された。
- 169) 金沢文庫 = 北条(金沢)実時が武蔵六浦荘金沢郷の別荘地内に創始した文庫。建治元年(1275), 隠退した実時は, この別荘で書写校合に余生を送り, 文庫の基礎を作った。子の顕時, 孫の貞顕により蔵書は増加したが, 鎌倉幕府滅亡後, 文庫は衰退し, 蔵書は散逸した。現存する典籍文書は, 約2万点。昭和五年(1930), 神奈川県立金沢文庫として復興され, 一般に公開されている。
- 170) 称名寺 = 横浜市金沢区金沢町にある, 金沢北条氏の菩提寺。金沢山弥勒院と号する。寺伝に

よれば、当寺は北条（金沢）実時が釜利谷から当地に邸を移建し、邸内に母の菩提を弔うため、文応元年建立した念仏寺に始まる。文応四年（1267）、開山として妙性審海をむかえ、真言宗の寺となったという。実時は、境内に仏典・和漢の書籍を集めて金沢文庫を設立し、図書の出納管理を当寺僧に委任していた。境内には、天元元年建立の本堂、正安三年鑄造の梵鐘、北条実時の墓などがあり、国史跡に指定されている。

- 171) 田中銀之助 = 生糸の相場で儲けた「天下の糸平」こと、田中平八の長女と北村菊次郎の間の長男として、明治六年（1873）に生まれる。父は三代目、田中平八を名乗り、糸平不動産、田中鉦山を興した。学習院中等科へ入学したが、後横浜のビクトリア・パブリック・スクールに入学し、明治二十二年（1889）、イギリスに留学した。ケンブリッジ大学に入学し、明治二十九年（1896）、学位取得後帰国、田中銀行の取締役役に就任した。後、田中鉦業、東洋鉦山、日本製鋼所の役員になる。
- 172) 光明寺 = 材木座にある浄土宗鎮西義六派の本山。山号は元照院、院号は蓮華院。寛元元年（1243）、然阿良忠は、鎌倉幕府執権北条経時に帰依され、佐介谷に蓮華院を建立し、のち光明寺と改め、方丈を蓮華院と名づけた。明応四年（1495）、八世の長蓮社観音祐崇は、禁中で浄土三部経などを修誦し、後土御門天皇の帰依を受け、当寺は勅願所となった。江戸時代には、百万石の朱印地を与えられ、日向国延岡の城主内藤義概は、二百万石を寄進するなど、旗本・御家人の檀家も多かった。
- 173) 竜口園 = 昭和三～九年頃、藤沢市の片瀬山公園の中にあった遊園地。六階建の展望台や動物園もあった。
- 174) 百八槽 = 覚園寺背後の山腹や頂上にわたり群集する中世墳墓で、177穴におよぶ。百八とは数の多いことになぞらえたもの。各槽内に、五輪塔や宝篋印塔を奉置する例が多く見られ、かつ壁面に仏菩薩を表す梵字を刻したり、地藏像を安置したりする。鎌倉の槽群中、最も規模が大きく優れた墳墓群として貴重である。
- 175) 覚園寺 = 二階堂にある、鷲峰山真言院と号する寺。本尊は薬師如来。建保六年（1218）、執権北条義時が、薬師如来を安置する大倉薬師堂を建立したことに始まる。室町時代には、足利氏の祈願所となる。戦国時代は、後北条氏の保護を受けたが、江戸時代には一時荒廃した。明治時代に入り、鐘楼、山門等を建長寺に売却し、明治二年、庫院を消失した。関東大震災では、諸堂が倒壊する被害を受けた。
- 176) 「二人ノオリエル」 = 「二人のオリイフェル」。第78回公演（6月13-24日）。久保栄記、土方与志演出、吉田謙吉装置。友田恭助（オリイフェル）、高橋豊子（妻）、山本安英（その娘）、東屋三郎（下宿の主人）、東山千栄子（オリイフィア）等出演。
- 177) 溝口三郎 = 明治二十九年（1896）生まれ。直正（伯爵）の6男。叔父・溝口武五郎の養子となる。模型舞台研究所のメンバーで、築地小劇場の発足時は、舞台装置部に席を置いていたが、東京美術学校卒業後は、帝室博物館で、漆塗りの金蒔絵描きをしていた。
- 178) 本田伊萬子 = 本田親済（男爵）夫人、不二磨の母。坊城俊政の六女。明治八年（1875）生まれ。
- 179) 八雲神社 = 大町1-11-22にある神社。永保年間（1083年）、新羅三郎が、京都の祇園社を勧請したと伝えられる。明治になって、八雲神社と改める。7月7日頃からの大町まつり例大祭では、4基の御輿が出る。
- 180) 『遺稿詩集』 収載。
- 181) 星ヶ岡陶窯 = 星岡窯のこと。北大路魯山人は、大正十四年（1925）夏から秋にかけて、北鎌倉山崎に、奥行き6尺、幅2尺8寸の2房の京窯を築き、職人を集め、作陶に励んだ。昭和二年（1927）十月には、「魯山人窯芸研究所 星岡窯」を発足させ、6千数百坪の敷地に、詠婦亭（東屋）、窯屋、茶席夢境庵、第一・第二参考館、来賓用の慶雲閣、富士見亭、田舎家、

- 工場を造った。星岡窯は、山裾の岩石を切り拓いた切通によって村道につながられた山懐であるが、この切通を魯山人は臥龍山と名付け、ここを抜けると別天地の趣があったという。
- 182) 北大路氏 = 北大路魯山人。明治十六年(1883)3月、京都上賀茂神社の社家・北大路清操の次男に生れ、房次郎と名付け届けられる。明治二十二年(1889)、上京区内木版師・福田武造の養子となり、木版業を手伝う。明治三十一年(1898)、寺社などが主催する習字の検証一字書きに応募し、受賞。その後度々応募する。明治三十六年(1903)秋上京し、書家を志望し、一時、巖谷一六、日下部鳴鶴に師事。明治三十八年(1905)、町書家・岡本可亨の内弟子となる。日展に出品し、入賞する。大正八年(1919)、京橋に大雅堂美術店を開く。同十年(1921)、美食倶楽部を、十四年(1925)、星岡茶寮を営み、料理に適した食器を求めて、作陶を試みる。昭和二年、北鎌倉に星岡窯を造り定住する。
- 183) 荒川サン = 荒川豊蔵。明治二十七年(1894)、岐阜県に生れる。大正十一年(1922)、京都の宮永東山の窯工場に勤める傍ら、古陶磁を研究する。昭和二年(1927)、魯山人の招きで、北鎌倉の星岡窯を助ける。昭和五年(1930)、岐阜県大萱の山中の古窯跡から、桃山時代の陶片を発掘し、桃山茶陶が美濃で焼かれたことを明らかにした。昭和八年(1933)、古窯跡近くに窯を築き、志野、瀬戸黒、黄瀬戸の再現に専念した。昭和四十六年(1971)、文化勲章受章。
- 184) 八十九度 = 31.7℃。
- 185) 八十七度 = 30.6℃。
- 186) 八十六度 = 30.3℃。
- 187) 貝塚 = 文化庁文化財保護部編集『全国遺跡地図・14 神奈川県(昭和56年)』によれば、「遺跡名称・無。貝塚(中区元町1丁目)、県遺跡番号5」とある。貝殻条痕文系土器が見られることから、縄文早期後半～前期の遺跡で、7千～8千年前のものと考えられる。
- 188) 松岡静雄 = 明治十一年(1878)、兵庫県に生まれる。海軍大佐、国学、言語学者。柳田国男の弟、画家・松岡映丘の兄。第一次大戦(1914年)には、連合陸戦隊を率いて南洋群島に出動し、カロリン諸島の主島ポナペ島に上陸。ジョカージ、ウ・ナット、ロンキチの各地を巡視して民情を観察、島民の懐柔に努める。この観察に基づいて『ポナペ開拓論』を草する。健康の悪化により退任し、以後、言語学や民族誌の研究に従事した。『太平洋民族誌』『チャモロ語の研究』『ミクロネシア民族誌』等、著書が多数ある。
- 189) 国性爺合戦 = 第79回公演(移転改築落成記念公演。11月11~30日)。近松門左衛門原作、小山内薫改作、土方与志演出、相山杉作演技監督、吉田謙吉装置。東屋三郎(思宗烈皇帝)、東山千榮子(華清夫人)、御橋公(右將軍李踏天)、友田恭助(呉三桂)他出演。
- 190) 御用邸 = 鎌倉御用邸。明治三十二年(1899)に設置され、広さ約18,000坪あった。関東大震災で罹災し、昭和六年(1931)に廃止された。現在、御成小学校、鎌倉市役所となっている。
- 191) 里見弴 = 明治二十一年(1888)、横浜に生れる。有島武郎、生馬の末弟。本名は、山内英夫。学習院に入学し、園池公致、児島喜久雄らと回覧雑誌『麦』を創刊する。東京帝大英文科中退後、志賀直哉に深く傾倒し、『白樺』同人となり、小説家の道を歩む。『河岸のかへり』『善心悪心』『多情仏心』ほかの、大正・昭和を代表する作品を書く。
- 192) 神威 = 大正十二年(1922)10月、ニューヨーク、シッパビルジング社で給油艦として竣工する。昭和七年(1932)、水上機母艦へ改装する。
- 193) 一部改め、「青蜥蜴の夢」(18頁下~19頁上、谷川健一編著『青春の記録8、わが青春のとき』1968年、三一書房)に収載。
- 194) 一部改め「青蜥蜴の夢」(19頁上~21頁下)に収載。
- 195) 表南洋 = 外南洋ともいう。東南アジア島嶼部のこと。
- 196) 裏南洋 = 内南洋ともいう。南洋群島(ミクロネシア)のこと。

- 197) サイパン = 南洋群島マリアナ諸島の火山島で、グアム島の北に位置する。面積 117k m<sup>2</sup>で、マリアナ諸島中最大。1565 年、レガスピが上陸し、この付近の島々を正式にスペイン領とする旨を宣した。第 1 次世界大戦後、日本委任統治領となる。日本時代には多くの日本人が移住し、各種の産業に従事した。特に製糖が盛んで、その代表的企業は南洋興発株式会社であり、多数の日本人がこの会社の下で小作として働いていた。1930 年、日本人人口は現地人の三倍以上であった。
- 198) 船内の様子は、一部改め、「青蜥蜴の夢」8-9 頁および『著作集』第 6 巻、172 頁以下に掲載。
- 199) サイパン島滞在中の事は、一部改め、「わが青春のとき」(『著作集』第 6 巻、176-179 頁) に掲載。
- 200) カナカ = カナカは、ポリネシア語で“人”あるいは“男”を意味するタガタを語源とする。しばしば太平洋の島々の住民をこの名で呼ぶことがあるが、あくまでも俗称であり、特定の島の住民やグループを指すものではない。しかし、当時、カナカ人と呼ばれていた人々は、チャモロ人よりも低い地位に置かれ、差別されていた。
- 201) チャモロ人 = ミクロネシアのマリアナ諸島の先住民。スペイン人と接触以前のチャモロ人口は 4 万とも 6 万とも推定されている。しかし、グアム島への強制移住、疫病の流行等の結果、最初の人口調査が行われた 1710 年には、3539 人にまで減少した。そのため、スペイン政府は、メキシコ人、フィリピン人労働者を積極的にグアムに導入した。それにより、多くの混血が生まれ、現在では、純粋チャモロは存在しないといわれている。ここでは、混血児を意味するものとして使われている。
- 202) チュアン = テニアン島、ティニアン島、チュニアン島とも記す。マリアナ諸島、サイパンの南西に位置する、面積 101k m<sup>2</sup>の火山島。ラッチと呼ばれる巨石柱の考古学的遺跡は諸島中最大である。かつては多くのチャモロ人が居住していたが、1695 年スペイン政府により統治の必要上からグアム島に強制移住させられた。その後殆んど無住で、野生化した牛や豚が生息していたが、日本の委任統治時代、日本人による製糖業が盛んに行われた。
- 203) 一部改め、「青蜥蜴の夢」(11 頁上 ~12 頁下) に収載。
- 204) 興発会社 = 南洋興発株式会社。日本の委任統治時代における製糖産業を中核とした、ミクロネシア最大の企業。大正十年 (1921)、政府が事業資金を融資して、サイパンに設立された。大正十二年 (1923) にサイパンに製糖工場が稼動し、その後昭和十年 (1935) までに、テニアン、ロタにも製糖・酒精工場が建設され、南洋最大の企業へと発展した。会社は、製糖業からの利益を他の資源開発に向け、鉱業、農林水産業を興した。
- 205) ヤップ = ミクロネシアのカロリン諸島西部にある島。大小 4 つの島で構成され、総面積 101km<sup>2</sup>。この島では、比較的伝統的生活が営まれており、伝統的島民の生計は、女性の耕作によるタロイモ、ヤマイモなどのイモ類と、男性による漁労に依存している。とりわけ、水田で栽培されるタロイモが重要な作物である。また、この島では、親族、村落間の儀礼的交換において、石貨と貝貨が大きな役割を果たしている。
- 206) パラウ = パラオとも記す。カロリン諸島西端の島群。面積 489k m<sup>2</sup>。北のカヤンゲル島からババルダオブ島 (本島)、コロール島、ベリリュウ島を経て南のアンガウル島まで一列に連なる。また、アンガウル島の南には、ソンソロール、ブルアナ、メリル、トビの 4 離島がある。この 4 離島が行政上パラオ地区に含まれるようになったのは、ドイツ植民地時代以降で、パラオの伝統的政治組織には含まれていなかった。高温多湿で年平均気温 27 度、年平均降水量 3700mm を記録する。5-10 月は南西風、11-4 月は北東風が吹く。
- 207) 当時、パラオの物価は高く、本土のおよそ 2 倍だった。
- 208) パラウ支庁 = パラオ支庁のこと。南洋庁の下に置かれた 6 つの支庁の一つ。
- 209) 伊藤氏 = 久功が乗船した山城丸の一等船客三人のうちの一人。芝浦電気の 30 歳くらいの若い



- 技師で、パラオには電話をひく仕事で来島した。
- 210) 南洋庁 = 国際連盟の委託を受けて統治した、旧ドイツ領南洋群島を管轄する官庁。南洋庁官制は、大正十一年(1922)3月31日公布され、長官(勅任官)は、内閣総理大臣の指揮監督を受けた。以後、昭和四年(1929)6月拓務省、同十七年(1942)11月、大東亜省に移管された。コロール島に置かれ、当寺の長官は、横田郷助であった。南洋庁の下に、支庁がサイパン、パラオ、ヤップ、トラック、ポナペ、ヤルートに置かれた。
- 211) ア・バイ = アは接頭語。会所、公衆屋、集会所あるいは島民議事堂と訳される、大型木造の建築物。当時は、ほぼ総ての村にア・バイが見られ、島民の生活とは切り離せないものとなっていた。ア・バイは、平時には男子独身者の合宿所にあてられ、戦時、警戒を要するときには、酋長の命令によって、全員で、或は交代でバイに宿泊する。また、外来客の接待や宿泊所に当てられる。釘を一つも使わず、木だけを組み合わせで作られたもので、外側には彩色した絵、内側には側板に彫刻が施されており、それぞれが物語を構成している。伝統的なものが殆んど失われてしまっているパラオでは、極めて貴重な文化遺産となっている。
- 212) コリヨル = コロール。パラオ諸島中部の島で、面積8k m<sup>2</sup>。現在、北にある通称パラオ本島と呼ばれるバベルダオブ島とは橋によって結ばれている。かつてコロールの長アイバドールは、バベルダオブ島マルキョクの長アルクライと並ぶ二大首長として権力をふるった。当時、南洋庁など、南洋群島施政の中心となり、日本人人口がパラオ人人口を上回っていた。
- 213) 本島 = パラオ本島のバベルダオブ島。パラオ諸島の主島。面積370k m<sup>2</sup>。安山岩よりなる火山島で、南北に長く、中央は山地で森林に覆われている。
- 214) 南貿 = 南洋貿易株式会社。南洋群島との交易を行う会社として、明治二十六年(1893)創業した。明治四十一年(1908)、社名を南洋貿易株式会社とし、南洋群島各所に支店を設け、海運やヤシ、コーヒー、麻栽培の拓殖事業、真珠養殖事業など、多角化経営を行っていた。
- 215) 佐久間氏 = 南洋庁農林課に勤める高級役人(判任官)。サイパンから山城丸の一等船室に乗船し、久功らとパラオまで同船した。
- 216) 昌南倶楽部 = 南洋庁職員の厚生施設。展示室があり、後に土方久功、杉浦佐助、赤松俊子、武田範芳の個展を開いた。
- 217) 『ミクロネシア民俗誌』 = 松岡静雄著『ミクロネシア民族誌』のこと。昭和二年(1927)、岡書院刊。
- 218) 公学校 = 南洋群島で日本の統治時代に、島の子供たちのために設立された小学校。この地の小学校教育は、すでに海軍占領時代から海軍守備隊によって行われていた。当初、この学校は小学校と呼ばれていたが、後に島民学校となり、大正十一年(1922)、南洋庁の管轄下に入って公学校と名を変えた。修業年限は3年で、南洋庁の支庁の所在地にある主要公学校には、その上に二年の補習科が併設された。入学年齢は8歳以上で、学費はなく、教科書、学用品は給付か貸与し、状況に応じて衣服、食料を与え、公教育の普及を図った。教科目は修身、国語、算術、理科、手工、唱歌、体操で、男子には農業、女子には家事を課した。最も力を入れたのは国語教育で、一年でカタカナ、二年でひらがな、三年では漢字まじりの口語文が読み書きできるようになることを目標とした。
- 219) アンベラ = 符籐。南アジアなどの熱帯地方の湿地に自生する多年草植物の茎を叩きつぶして織ったムシロ。
- 220) カイバクル = パラオ島民がカヌーを造るときなどに用いる手斧。久功は、レリーフを彫るのに、このカイバクルを使っていた。
- 221) 杉浦 = 杉浦佐助。明治三十年(1897)、蒲郡市神之郷町に佐兵次の五男(末子)として生れる。生家は三河木綿の間屋だったが、商売に失敗したため、14歳で宮大工の年季奉公に出される。大正六年(1917)、二十歳のとき、年季が明け、徴兵検査が終ると、南洋へ渡る。久功と出会

って彫刻の弟子となり、美術史や解剖学を学び、木彫の制作をする一方、久功の民族調査のさいの通訳として、行動をともにする。昭和六年（1931）10月、久功とともに、人口280人の絶海の孤島サタウル島に渡り、八年在島する。

- 222) アラカベサン＝コロール島の西北にある小島。干潮時には、コロールと地続きになる。久功がサタウル島から戻った昭和十四年（1939）には、コロールとの間は道路が出来ていた。風景は美しく、現在、東急のリゾートホテルが建っている。
- 223) オレアイ＝パラオの東、約1,000キロにある環礁島。
- 224) ソンソル人＝ソンソロール島民。パラオ諸島南端のアンガウル島のさらに南にある離島。行政上パラオ地区に含まれているが、パラオの伝統的政治組織には含まれていなかった。
- 225) 木工学校＝公学校を卒業した男子島民に建築技術を教える2年制の学校。
- 226) メナード＝メナド（Menado）。インドネシアのほぼ中央、セレベス島（スラウェシ島）の北端に突出するミナハサ半島第一の港。16世紀、ポルトガルによって香料の貿易港として発展した。1910年代から20年代には、道路、鉄道が完成し、大きく発展した。1916年、メナドの日本人は約30人で、雑貨商、売薬商、大工、南洋貿易株式会社の支店などがあつた。また、大正五年（1916）、南太平洋貿易株式会社がメナド支店を開設し、各地に分店を置き、コブラの買い付けを行っていた。このほか、ヤシ栽培、金鉱採掘、製材、真珠母貝採取などを行った。昭和十三年（1938）には、メナド日本人会会員は191人であった。
- 227) 大工サンノ話＝これら杉浦佐助の話したことは、「わが青春のとき」（『著作集』第6巻収載）に記されている（213～217頁）。
- 228) 蛸ノ木＝タコノキ科の常緑樹。パンダナスとも呼ばれる。高さ10m内外、下部には太い気根を多数生じ、これが地面に達し、地中に入り込んで支柱状となる。気根の様子がタコの足に似ていることからこの名があるという。葉は長さ1～2m、幅は7～8cm、細長い剣状で枝の頂部に密集して生じ、葉冠を形成する。この葉を細く裂いて、籠や敷物を編む。また、これで腰巻を作ったり、屋根ぶきの材料とする。
- 229) 南洋松島＝コロール島からパラオ諸島の南端に近いペリリュウ島にかけて連なっている大小無数の島々のこと。パラオ松島ともよばれたほどに美しい景観をなしている。今は、ロックアイランドとよばれている。
- 230) 太郎芋＝タロイモのこと。サトイモの1品種で、ミクロネシアでは、広く栽培されている。パラオでは、田圃が作られ、タロイモ栽培は女性の仕事とされている。
- 231) 檳榔樹＝ヤシ科の高木で、高さ20mに達する。果実は長さ3～5cmほどの卵形。パラオでは、石灰をまぶしたビンロウジュをキンマの葉に包み、噛む習慣がある。多少の刺激性、興奮性の麻酔作用がある習慣性の清涼嗜好品。これを常用すると、口の中から唇まで真赤になる。
- 232) アルミツ＝ガルミツとも記す。コロールの町からおよそ4km離れた、コロール島の東側突出部にある、海に面した村。久功はしばしばこの村を訪れ、その時のことを、詩や随筆に書いている。
- 233) 木蔭ノ水溜り＝洗身池のこと。村の女達はここで水を浴びる。久功は、洗身池をいくつも作品に描いている。
- 234) ウドウド＝パラオ人の使用している伝統的財貨。多くの種類があり、材質により、①陶土製、②ガラス製があり、形状では、①舟形、②球形、卵形、その他がある。紐を通して女性の首にかける。パラオ人にとって極めて重要な価値を有するもので、人生儀礼の様々な機会に贈られる。
- 235) この本島行きの旅は、一部改められて、「わが青春のとき」（『著作集』第6巻収載）217頁以下に記されている。

- 236) アイライ = パラオ本島南東部, 東海岸にある村。コロールに最も近く, 現在空港がある。
- 237) カイシャル = パラオ本島南東部の東海岸, アイライから北約 10km の所にある村。昔は, コロールと並ぶ有力な村だった。
- 238) 『遺稿詩集』に収載。
- 239) 『遺稿詩集』に収載。
- 240) 『遺稿詩集』に収載。
- 241) 『遺稿詩集』に収載。
- 242) 『遺稿詩集』に収載。
- 243) 『遺稿詩集』に収載。
- 244) 『遺稿詩集』および「金沢の旅」(『同時代』34号, 74頁下) 収載。
- 245) 『遺稿詩集』および「金沢の旅」(『同時代』34号, 74頁下) 収載。

